

結核の文学史序説 病の比較文化史的研究

福田 眞 人

構成

1. はじめに
2. 問題の所在と考察の可能性について
3. イメージとその威力の凄まじさ

1. はじめに

人間は生老病死からは自由ではない。

いきとし生けるものは皆、老い、病に苦しみ、そして死ぬ。

生死はいつも人生の重大事だが、その人間の誕生から死に至る過程で、人間を苦しめる病に関する思いは事の他多いにも拘わらず、十分に文化的にも精神的にも、解明され記述されてこなかった。

この研究は、すでに筆者が行ってきた病気の文化史的研究¹⁾の延長線上にあるもので、とりわけ文学における病に注目して、その表出、表象を分析・考察しようとするものである。

近代英国と日本における結核という病の比較文化史的研究の結果、ある病のイメージ形成に果たす文学の役割の大きさに驚かざるを得なかった。ペストや梅毒²⁾が文学に与えた影響、逆に文学がそれらの疾病のイメージ形成に与えた影響もさることながら、特に顕著に見られたのは結核に関する記述の多さと、そのイメージの拡がりの大きさ、イメージの偏りといったことである。

本論文では、ともかくにも結核にまつわる様々な言説、風聞、諸説を文学作品上で探る可能性を検討してみたい。その際、個別の作品が検討の対象になるであろうし、また結核に罹患した作家の作品に表象された病のイメージも当然検討、考察の対象になるであろう。そうした事象を詳細に検討した上で、いずれ病一般に関しても分析・考察の幅を広げてみたい。

さし当たり、結核患者の登場する文学、結核患者としての作家、作中に言及されるだけの結核という病、そうした幅広い問題提示の可能性について考えてみることにしよう。

しかし、そこではいつも、いったいある病の文学史などというものが可能かどうかという問いかけが不可欠である。そうした問いかけがなければ、あらゆる疾病に関して安

易な、どのような記述も可能となるであろう。

2. 問題の所在と考察の可能性について

結核に関する記述を含む文学の歴史、つまり「結核の文学史」を考えるに当たって、次のようにさまざまな範疇を含むことを明確にしておく必要がある。

- (1) 結核患者としての作家の経験、経歴。
- (2) 文学作品の主題としての結核。
- (3) 作品の中にある程度描写された結核という病。
- (4) 作品中にただ結核という言葉のみがあった病。
- (5) 描写も言及もないが、しかし、あきらかに結核を想起させる病の存在。

さらに問題はここから急激に拡大し、展開する可能性がある。それは、読み手の登場であり、その読み手の読後の感想、反応である。それらはほとんど資料的に見ても、また分析・考察の範疇に入らないかもしれないけれど、念頭に置いておく必要はある。

それらの問題点は、おおよそ以下のように纏められる。

- (6) 作家、作品の影響
- (7) 作品の描写の信憑性とそれに関する読者の印象と感想の拡がり
- (8) あらゆる意味で、時代の常識、医学的知識、俗信、誤謬、風聞と言ったことが反映されている可能性
- (9) 作品自体の出来具合
と言ったことである。

たとえば結核に罹患した作家が、自分の経験を通して書いた作品があったとしても、そこで結核が果たす役割は様々である。

もっとも重要な役割を果たしていると考えられる、主人公（私小説の作家＝主人公も含め）の結核療養生活から、ほんの背景としての結核、さらにはそのような病気が微かに言及されていること、あるいはその病がもたらしたと考えられる雰囲気描写が描写されているだけの場合まで、実に幅広い。

さて、こうした問題意識のもとで、現実にはどのような実例が当てはめられるかを例示しておく必要がある。その当たりをつけておけば、そこから問題の分析・考察に乗り出すことができる。各項目ごとに検討してみよう。

- (1) 結核患者としての作家の経験、経歴。

添付された表に見るように、数多くの作家が肺病、結核を病んでいた。そうした中で、俳人正岡子規（1867 - 1902）ほど如実に自身の結核体験を作品中に発表し、かつその詳

細な記録を残した人もないだろう。子規の、一見客観的事実の羅列にさえ見える日録にしても、その実、深い絶望と、それと共に生き永らえるという力強い営為への意志が見られるのである。

それに反して、堀辰雄（1904 - 53）の書いた大概の作品では、結核患者はあまりに美しく、夢見がちである。堀の作品『美しい村』（昭和9年, 1934）や『風立ちぬ』（1938）の中の療養地としての軽井沢の風景は、今日なお日本人の想像力を刺激してあまりある。そこで知り合った婚約者（矢野綾子）と連れだって富士見高原療養所（所長正木不如丘）に入所した堀は、束の間のままごと遊びのような同棲を楽しむのである。しかし、すぐそうした甘い生活は矢野の死によって終止符を打たれる。

ここで、作家の手紙や日記をどのように取り扱うかという問題が残る。それは、堀の療養所入所中の手紙や日記と、その後の作品の中での結核患者の描写との乖離があまりにも激しすぎるからである。

（2）文学作品の主題としての結核。

作品の主題が結核であるということは、本来ありえないことであろう。もっと範囲を広げても、病気が主題であるという作品は稀有であろう。あったとしても、それは寓意アレゴリ的な作品であるか、実験小説であると言ってよい。むしろ、範疇カ（3）のものが多いと考えるのが妥当であろう。

（3）作品の中にある程度描写された結核という病。

すべての作品を網羅することは不可能に近いが、作中人物の誰かが結核に罹患したとか、噂になったとかの記述のある作品は、相当の確率で引き出すことが可能であろう。なお、その言及の仕方もけっこう重要な問題である。そこに意味を見出すこともまた重要な分析・考察の視点であろう。

（4）作品中にただ結核という言葉のみがあった病。

こうした作品のタイトルを集めることはほとんど無意味かもしれない。しかし、時代の流行という点にも注意を払い、その言及の変化を調べてみることには意義があるだろう。コレラやトラホーム、はては天然痘、癌という描写があるだろう。明らかに、エリック・シーガルEric Segal（1937 - ）の小説『ある愛のうた』（*Love Story*, 1970）とその映画化（1970）は、白血病への親しみを増したし、後に多くの日本の少女漫画に登場するきっかけを作ったと言ってよい。それどころか、登場人物の主要な病が、結核（肺病）から白血病へ移行する契機を作ったかも知れない。

（5）描写も言及もないが、しかし、あきらかに結核を想起させる病の存在。

さらに問題はここから急激に拡大し、展開する可能性がある。それは、読み手の登場であり、その読み手の読後の反応である。それらはほとんど資料的に見ても、また分析・考察の範疇に入らないかもしれないけれど、念頭に置いておく必要はある。

それらの問題点は、おおよそ以下のように纏められる。

(6) 結核に罹患した作家の日記、手紙の類の取り扱いについて

これは範疇(1)に関係するのみならず、結核作家が書いた作品の中に描かれた結核という病を知る上で重要な手がかりになるものである。その意味で範疇(3)にも関係が深い。例えば胃潰瘍で死んだ夏目漱石(1867 - 1916)の初期の手紙を読むと、自ら結核に感染していたことが語られている。恐らくは母親もこの病で斃れたのであり、二人の兄も順次肺病で死ぬ。やがて結核に斃れる親友の正岡子規との交流の中で、漱石は鷹揚に子規に接してはいたものの、一旦自分の結婚相手の選択という段になると、肺病患者の家系を拒否しているのが明らかに分かる。手紙が資料として重要な意味を持つことはここに首肯される。

堀辰雄の手紙も、堀の作品、個人的生活を知る上で重要な役割を果たす。とりわけ結核と常に分かちがたい生活、創作活動を続けていた堀であってみれば、その書簡の意味の重大さはただちに感得される筈である。

(7) 作家、作品の影響

作家の影響という点では、すぐに太宰治(1909 - 48)が想起される。太宰は、結核に病みながら最終的には愛人山崎富栄と多摩川上水に入水自殺を遂げるのであるが、その太宰を師と仰いでいた田中英光(1913 - 49)は、ロサンゼルス・オリンピックのボート代表選手という恵まれた身体ながら、太宰の才能を得るべく泥水を飲んで身体を痛めつけ、それにさえ失敗して太宰の墓前に自殺して果てた。太宰の才能を、結核のためであると信じて疑わなかったところに当時の世間に流布していた肺病天才説の拡がりとその強さをみることができる。

文学作品の社会的影響力は、古今東西を問わずけっして小さくない。ゲーテ(Johann V. von Goethe, 1749 - 1832)の『若きヴェルテルの悩み』(*Leiden des jungen Werthers*, 1774)がドイツで発行された後、ヴェルテル風の衣装を着て、ヴェルテルの如き拳銃による自殺を企てるものが少なくなかったことは有名な話であるが、さしづめ結核という観点では徳富蘆花の『不如帰』(明治31年、1898)がもたらした興奮とその後の影響力の強さを上げておくのがよからう。

『不如帰』は、流行歌になり、短歌に歌われ、川柳になり、新劇で巷の紅涙を絞り、4度映画化された。この作品は、巷の宴会で盛んに寸劇で演じられた(とりわけ、京都山科駅での悲しいハンカチの別れの場面が)のみならず、その後昭和30年代になっても地方の町々を回る紙芝居の重要なタイトルだったのである。

(8) 作品の描写の信憑性とそれに関する読者の印象、感想、拡がり

(9) あらゆる意味で、時代の常識、医学的知識、俗信、誤謬、風聞と言ったことが反映されている可能性

小説や俳句、短歌のみが結核の重要な資料なのではない。それ以外に、作品の背景にある医学や衛生関係の文献も同様に重要な役割を果たす。というのも、それらが如実に当時の結核に関する知識や治療法、対策を記述し、時には恐るべき俗信をその内を含んでいるからである。むしろ医学的知識よりも、その行間に含まれる世間に流布している噂や俗信の痕跡を見いだすことにおおきな意義があるかも知れない。

たとえば江戸と明治の医者、労咳、肺病、結核に対する記述の内容に注目して見ると、そこに共通して流れている、いわば金持ち、上流階級、才能のある若者の病気という認識がある。世間の人々が俗信で信じていたばかりでなく、医師もまたそうした俗信の伝達・再生産に一役かっていたのである。

(10) 作品自体の出来具合

作品や、作家の評判が、その作品の中に描かれた情景をより読者に深く印象づけるかどうかに影響していることは頷ける。しかし、それが結核のイメージ形成にどれほどの影響があったかを正當に評価するのは困難であろう。むしろ、作家自体の生活、結核患者としての履歴の方が、より読者に深い印象を残している場合も考えられる。梶井基次郎(1901 - 31)の生涯を彩る結核と、彼の作品中の結核描写は、作家と作品を分け難く感じさせる。

むしろ、結核患者が書いた結核の描写・記述が正確であるか、そうでないか、さらに結核患者でない作家、歌人、俳人、劇作家が書いた作品の中で結核が描かれたとして、それが十分読むに堪えるものであるのかないのか、という問題がある。

結核でない作家が書いた背景のひとつとしての結核に関する記述が含まれた永井荷風(1879 - 1959)の『新任知事』(明治36年, 1903)では、昼間華やかな公人としての生活を送る知事夫婦が、夜は二人だけになって、孤独に咳をし合うという情景がある。その咳はいかにも重く、やがて二人を襲うであろう死の影がほの見える。

さらに結核でない作家が書いた小説、短歌、俳句の中の主題としての結核の愁眉は、すでに述べた徳富蘆花の『不如帰』であろう。蘆花は、モデルになる人(後の元帥大山巖とその娘信子)のすぐ近くにいた人から話を聞き、それを小説化したのだが、すでに小説が出される6年前にドイツの細菌学者ローベルト・コッホ(Robert Koch, 1843 - 1910)によって結核菌が発見され、それこそが結核の原因であることを世界に示していたのだが、この小説では医学界の常識と俗信とが微妙に入り交じって、興味深い記述が多い。

たとえばそれは結核の伝染説と遺伝説の両方の記述が同時に出てくることでも見て取れる。それは蘆花が無知であったということではなく、むしろそれこそが当時の社会的状況だったのである。科学的新知識と、旧来の伝統的解釈あるいは俗信がない交ぜに

なって人々の頭の中にあったということである。しかしどちみち結核患者は扱い難いものとして隔離されるかひどく差別されるかのどちらかしかなかったのである。

結核が、あるいは結核患者が描かれているから、その記述がすべて正しいとは限らない。さらに、主題に沿ってより効果的演出をするために、結核が使用されている場合は注意を要する。

極端な場合、病気は胃ガンでも天然痘でも麻疹でも結核でも何でも良くて、登場人物の誰かがとにかく病気である必要がある状況である場合がある。

すると、登場人物の病気が結核であっても、記述された情報自体は結核に関するものだが、その情報は曖昧でそれをそのまま鵜呑みすることが不可能な場合もある。つまり登場人物の小説中での位置づけや重要度によって、病気の表象、表出の質、量、形態すべてを精密に吟味する必要が生じる。

そうした分析・考察に際して、時代の病気とその背景という観点も重要になるだろう。

つまりある時代に流行した病気、たとえば明治初期の日本で流行したコレラには、その時代の俗信やら迷信がたっぷり盛り込まれている上に、病気に対する基本的に無知な人々の混乱やら騒動やらがある。(電柱に張られた電線がコレラを伝染させると信じて、電柱を避けて歩く人の姿を一概に笑い飛ばすことはできない。)それが妙におかしかったり滑稽だったりするわけだが、それ以上に、無力な患者の苦悩と苦痛があらさまに伝わってくる。

結核も、無知でなんのいわれもない人々を突然襲って、大変な苦痛をもたらした。あろうことか、更に差別や隔離といった現象をもたらし、病気以外の苦痛も計り知れないものがあつた。そこに付随するイメージの肥大化や美化や絶対化、差別化、さらには無化するといった社会的傾向が読み取れる。

いわば老若男女、貧富貴賤の分け隔て無く襲ったのにもかかわらず、イメージはある特定のグループに指向し固まってみられる。

その不思議な傾向の由来は何か、結核が社会で抛って立つところのものはなにか、それが問題である。

3 . イメージとその威力の凄まじさ

英国の詩人バイロン (Lord Byron, 1788 - 1824) が、女たちに自分が美しく死ぬように見えるので「肺病で死にたい」という願望を漏らしたという逸話と、堀辰雄が結核の特効薬である抗生物質ストレプトマイシンの日本への登場を聞いて、「いったい僕から結核菌を取り除いたら何が残るんだい」という問いには、空間的には日英の、時間的に120

年以上の隔たりがあるが、意識はほとんど同じ線上にあったと言っても過言ではないだろう。

イメージの共有という点では、すでにイタリアのボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』に描かれた女神のモデルとしてのシモネータ・ヴェスプーチ (Simonetta Vespucci, 1453 - 76) と、英国の画家ミレーの『オフエーリア』のモデルとしてのエリザベス・シッター (Elizabeth Elenor Siddal, 1830 - 62) の時空を超えた同質の美への賞賛という共通点があった。二人はまた共に肺病で夭折した。

こうした分かり易い絵画における患者の描写とは別に、もっと言語的段階、つまり単語語彙の段階で興味深い現象があらわれていることもつとに述べた。⁽³⁾

それは英語の二つの段階、[consumption] と [tuberculosis] において如実に見られたように、独特の意味付けが行われていた。スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850 - 94) が嘆いて見せたように、[consumption] という言葉はまるで武器を消費するように病気を語られ、笑い話にさえなっていた。それが近代において益々重要性を帯びてきた「消費」という問題と直接的に関わっていたので、しばしばそれと混同される。

しかし、もう一点重要なことは、かつて使用された語彙である [consumption] が今や死語になり、別の意味だけが生きているという事実である。それは主に、より病理的解剖学的知見が活かされた語彙である [tuberculosis] が使用されるようになったからである。この語は元々、病的な病巣である「結節」[tuber] から発しており、より適切で医学的表現と思われるに至ったからである。最初に結核の意味で使用されたのは、1869年ドイツの病理学者シェーンラインによる。

しかし、肺病という言葉も、結核という言葉も同様に使用され、それぞれが独特の意味を帯びて使用された。それどころか、「肺病」という言葉を使用することで、患者もその家族も同様に痛めつけられるというので、あえて忌避するという態度も生じたのである。(未完)

【注】

- (1) 福田真人『結核の文化史 - 近代日本における病のイメージ』(名古屋大学出版、1995)、『結核という文化』(中央公論新社、2001)ならびにその他の諸論文において結核に言及している。
- (2) たとえば、寺田光徳『梅毒の文学史』(平凡社、1999)と彼の翻訳になるC.ケテル『梅毒の歴史』(藤原書店、1996)を参照せよ。
- (3) 現象としては、大きく言って3段階の変化があったと言える。それは日本語では、[労咳] [肺病] [結核] という変化であり、英語では、同様に [phthisis] [consumption] [tuberculosis] という変化である。

使用年代の幅、意味の幅は共に同一とは言いがたいが、そこに大きな3段階の変化を読みとることもあながち間違えとは言えない。

つまり、咳をし身体の弱る消耗病という印象から、恋煩いをも含んだ、咳、瘦身、盗汗（寝汗）、咯血を伴う病気という印象へ、さらには結核菌による病巣がまず肺にできる病気への病理学的所見への変化である。

[付録]

結核患者および結核関連文学表

[日本の結核患者、関係者]

- 武田信玄（1521 - 1573）戦国甲斐の国の武将
白隠禅師（1685 - 1768）臨済宗の僧
頼 山陽（1780 - 1832）歴史学者・漢詩人
徳川斉昭（1800 - 60）水戸藩主
佐藤泰然（1804 - 74）順天堂の開祖
緒方洪庵（1810 - 63）医師、適塾（西洋医学塾、大阪、福澤諭吉）
木戸孝允（1833 - 77）長州藩士、明治の元勳、遣米欧使節
土方歳三（1835 - 69）新撰組副長
高杉晋作（1839 - 67）長州奇兵隊
司馬凌海（1839 - 79）医師、愛知医学校校長
沖田総司（1842 - 68）新撰組隊士、松本良順の治療
新島 襄（1843 - 1890）同志社
陸奥宗光（1844 - 97）外交官、下関条約（日清戦争）
末広鉄腸（1849 - 96）評論家、政治家
馬場辰猪（1850 - 88）政治論客、アメリカで客死
小野 梓（1852 - 86）論客、早稲田大学創立
小村寿太郎（1855 - 1911）外交官、ポーツマス条約（日露戦争）
森 鷗外（1862 - 1922）軍医、作家
二葉亭四迷（1864 - 1909）作家、ヨーロッパからの帰途ベンガル湾上で死す
若松賤子（1864 - 96）文学・翻訳者
夏目漱石（1867 - 1916）作家・英文学者
正岡子規（1867 - 1902）俳人、『病牀六尺』、『仰臥漫録』
斎藤緑雨（1867 - 1904）作家
福澤桃介（1868 - 1938）事業家、電気王、福澤諭吉の娘婿
国木田独歩（1871 - 1908）作家、南湖院
高山樗牛（1871 - 1902）美学者、作家
樋口一葉（1872 - 96）作家
網島梁川（1873 - 1907）作家
島木赤彦（1876 - 1926）歌人
大山信子（1877 - 96）大山巖の娘、『不如帰』の主人公浪子のモデル
牧野省三（1878 - 1929）映画製作者、日本映画の父
寺田寅彦（1878 - 1935）物理学者、漱石の弟子

- 荻原守衛 (1879 - 1910) 彫刻家、号は碌山
 長塚 節 (1879 - 1915) 歌人、『鍼の如く』
 瀧廉太郎 (1879 - 1903) 作曲家、『荒城の月』
 山川登美子 (1879 - 1909) 歌人、与謝野寛、晶子との交友。
 青木 繁 (1882 - 1911) 画家
 斉藤茂吉 (1882 - 1953) 歌人・精神病医
 竹久夢二 (1884 - 1934) 画家、詩人、富士見高原療養所
 石川啄木 (1884 - 1912) 歌人
 高村智恵子 (1884 - 1938) 折り紙作家、高村光太郎、『智恵子抄』
 尾崎放哉 (1885 - 1926) 俳人、「せきをしてもひとり」
 葛西善蔵 (1887 - 1928) 作家、破滅型
 大手拓次 (1887 - 1934) 詩人
 中村 彝 (1888 - 1924) 画家・詩人
 中原悌二郎 (1888 - 1921) 彫刻家
 安井曾太郎 (1888 - 1955) 画家、1年半療養。京都。木綿問屋。
 中村憲吉 (1889 - 1934) 歌人
 郡 虎彦 (1890 - 1924) 戯曲、英国で客死
 小酒井不木 (1890 - 1929) 推理小説家・血液学者
 富田碎花 (1890 - 1984) 詩人
 岸田劉生 (1891 - 1929) 洋画家
 直木三十五 (1891 - 1934) 作家、脊椎カリエス
 倉田百三 (1891 - 1943) 作家、思想家
 芥川龍之介 (1892 - 1927) 作家
 古賀春江 (1895 - 1933) 洋画家
 宮沢賢治 (1896 - 1933) 詩人
 村山槐太 (1896 - 1919) 画家・詩人
 嘉村磯太 (1897 - 1933) 作家、破滅型
 芹沢光治良 (1897 - 1993) 作家、『ブルジョワ』、『人間の運命』
 佐伯祐三 (1898 - 1928) 画家、パリで客死
 八木重吉 (1898 - 1927) 詩人
 横光利一 (1898 - 1946) 作家、『春は馬車に乗って』、『花園の思想』
 関根正二 (1899 - 1919) 画家
 川端茅舎 (1900 - 41) 俳人
 富永太郎 (1901 - 25) 詩人
 梶井基次郎 (1901 - 32) 作家
 日野早城 (1901 - 56) 俳人
 三岸好太郎 (1903 - 34) 洋画家
 島木健作 (1903 - 45) 歌人
 堀 辰雄 (1904 - 53) 作家、『美しい村』、『風たちぬ』
 加藤楸邨 (1905 - 89) 俳人、人間探求派

- 伊東静雄 (1906 - 53) 詩人
人見絹枝 (1907 - 31) アムステルダム・オリンピック800m走銀メダル
中原中也 (1907 - 37) 詩人、結核性脳膜炎
矢田津世子 (つせこ) (1907 - 44) 作家
清水幾太郎 (1907 - 1986) 社会学者
石橋秀野 (1909 - 47) 俳人、俳人山本健吉の妻
太宰 治 (1909 - 48) 作家
埴谷雄高 (1909 - 97) 作家
日野原重明 (1911 - 現存) 医学者、聖路加病院院長
田中英光 (1913 - 49) 作家、ロサンゼルス・オリンピック選手、肺病死願望
新美南吉 (1913 - 43) 童話作家
織田作之助 (1913 - 47) 大衆作家
石田波郷 (1913 - 69) 俳人
大原富枝 (1913 - 2000) 作家、『ストマイつんぼ』(1957)
立原道造 (1914 - 39) 詩人、軽井沢、『葦草に寄せる』
丸山真男 (1914 - 96) 政治学者、思想家
加藤道夫 (1918 - 53) 劇作家、自殺
福永武彦 (1918 - 79) 作家
芥川比呂志 (1920 - 81) 俳優、演出家、芥川龍之介の長男
安岡章太郎 (1920 - 存命) 小説家
三浦綾子 (1922 - 99) 作家
上田三四二 (1923 - 89) 歌人
遠藤周作 (1923 - 95) 作家、『海と毒薬』
吉行淳之介 (1924 - 94) 作家
河合雅雄 (1924 - 存命) 動物生態学者
相良 宏 (1925 - 55) 歌人
芥川也寸志 (1925 - 89) 作曲家、芥川龍之介の三男
金山康善 (1926 - 59) 画家
藤沢周平 (1927 - 97) 作家、『半生の記』、『小説の周辺』
矢代静一 (1927 - 98) 劇作家
吉村 昭 (1927 - 存命) 作家、妻津村節子の作品『玩具』
渥美 清 (1928 - 96) 俳優
郷 静子 (1929 - 存命) 作家
渡辺京二 (1931 - 存命) 評論家
瀬木慎一 (1931 - 存命) 美術評論家
黒柳徹子 (1933 - 存命) 女優
江藤 淳 (1934 - 99) 評論家、母親結核死
大藪春彦 (1935 - 96) 探偵小説作家
阿刀田高 (1935 - 存命) 作家、姉も昭和2年結核死
阿久 悠 (1937 - 存命) 作詞家、13歳で発病

中谷 巖 (1942 - 存命) 経済学者

参考：世界の結核患者表

諸葛孔明 (180 - 234) 中、劉備の蜀に迎えられた軍師、『三国志演義』

杜甫 (871 - 770) 中、漢詩人

聖フランシス (St. Francis of Assisi, 1182? - 1226) 伊、聖職者

ヴェスプーチ (Simonetta Vespucci, 1453 - 76) 伊、絵のモデル、ポッティチェリ

リシュリユー (Cardinal Richlieu, 1585 - 1642) 仏、政治家

デカルト (René Descartes, 1596 - 1650) 仏、思想家

ジョン・ハーバード (John Harvard, 1607 - 38) 米、1636 ハーバード大学創立。

モリエール (Jean Baptiste P. Molière, 1622 - 73) 仏、作家

パスカル (Blaise Pascal, 1623 - 62) 仏、科学者、文学者

スピノザ (Baruch Spinoza, 1632 - 77) 蘭、思想家

ジョン・ロック (John Locke, 1632 - 1704) 英、思想家、シデナムの治療を受ける

ワトー (Jean Antoine Watteau, 1684 - 1721) 仏、画家

ポープ (Alexander Pope, 1688 - 1744) 英、作家

ヴォルテール (Francis M.A. Voltaire, 1694 - 1778) 仏、思想家、百科全書

ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712 - 78) 仏、思想家

スターン (Lawrence Sterne, 1713 - 68) 英、作家

デイドロー (Denis Diderot, 1713 - 84) 仏、百科全書派

ボンパドゥール夫人 (Madame Pompadour, 1721 - 64) 仏、ルイ15世の愛人

カント (Immanuel Kant, 1724 - 1804) 独、哲学者

ブリストリー (Joseph Priestley, 1733 - 1804) 英、科学者、酸素の発見

シラー (Friedrich von Schiller, 1759 - 1805) 独、戯曲

ロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759 - 96) 英、詩人

ノヴァーリス (Novalis, 1772 - 1801) 独、詩人

ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1775 - 1817) 英、作家

ワシントン・アーヴィング (Washington Irving, 1783 - 1859) 米、作家

ボリバ (Simon Bolivar, the Great Libertador, 1783 - 1830) ボリビア建国の英雄

ウェーバー (Carl Maria von Weber, 1786 - 1926) 独、作曲家

ラマルティエヌ (Alphonse M.L. de Lamartine, 1790 - 1869) 仏、詩人、政治家

シャンポリオン (Jean François Champollion, 1790 - 1832) 仏、エジプト学者

シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792 - 1822) 英、詩人

キーツ (John Keats, 1795 - 1821) 英、詩人

ハイネ (Heinrich Heine, 1797 - 1856) 独、詩人

バルザック (Honoré de Balzac, 1799 - 1850) 仏、作家

アベル (Niels Henrik Abel, 1802 - 29) ノルウェー、数学者

エマーソン (Ralph Waldo Emerson, 1803 - 82) 米、作家

ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804 - 64) 米、作家

ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning, 1806 - 1861) 英、詩人

エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809 - 49) 米、作家
ショパン (Frédéric François Chopin, 1810 - 49) ポーランド、作曲家
ナポレオン二世 (Napoleon II, 1811 - 1832) ローマ王、ナポレオンの子ども
ガロワ (Évariste Galois, 1811 - 32) 仏、数学者
シャーロット・ブロンテ (Charlotte Bronte, 1816 - 55) 英、作家、『ジェイン・エア』
ソロー (Henry David Thoreau, 1817 - 62) 米、作家、『森の生活』
エミリー・ブロンテ (Emily Bronte, 1818 - 1848) 英、作家、『嵐が丘』
アン・ブロンテ (Anne Bronte, 1820 - 1849) 英、作家、『アグネス・グレイ』
ドストエフスキー (Fyodor Mikhailovich Dostoevsky, 1821 - 81) 露、作家
フォスター (Steven Foster, 1826 - 74) 米、作曲家
ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828 - 1882)
エリザベス・シダール (Elizabeth Elenor Siddal, 1830 - 1862)
ブレシス (Alphonsine Marie du Plessis, 1824 - 47) 仏、女優、『椿姫』のモデル
シドニー・ラニアー (Sidney Lanier, 1842 - 81) 米、詩人、『フロリダ、風景、風土、歴史』
ゴーギャン (Paul Gauguin, 1848 - 1903) 仏、タヒチへの逃避行、画家
トルドー (Edward Livingston Trudeau, 1848 - 1915) 米、医師、サナトリウム
スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850 - 94) 英、作家
セシル・ローズ (Cecil Rhodes, 1853 - 1902) 南ア、政治家、首相
アントン・チェホフ (Anton Pavlovich Chekhov, 1860 - 1904) 露、戯曲家
オー・ヘンリー (O. Henry, William Sydney Porter, 1862 - 1910) 米、作家
ロマン・ロラン (Romain Rolland, 1866 - 1944) 仏、作家
アンドレ・ジッド (André P.B. Gide, 1869 - 1951) 仏、作家
スティヴン・クレイン (Stephen Crane, 1871 - 1900) 米、作家、戦争報道
ビアズレー (Aubrey Vincent Beardsley, 1872 - 98) 英、イラストレーター
サマセット・モーム (William Somerset Maugham, 1874 - 1965) 英、作家
ブルース (James Bruce, 8th Earl of Elgin, 1811 - 63) 英、政治家、植民地統制官
魯迅 (Lu xun, 1881 - 1936) 中、作家
ブラック (Geroges Braque, 1882 - 1963) 仏、画家
フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883 - 1924) 奥、作家
モジリアニ (Amedeo Modigliani, 1884 - 1920) 伊、仏、画家
ロレンス (D.H. Lawrence, 1885 - 1930) 英、作家
ラマヌジャン (Srinivasa A. Ramanujan, 1887 - 1920) インド、数学者
マンズフィールド (Katherine Mansfield, 1888 - 1923) NZ生まれの英国の作家
ユージン・オニール (Eugene Gladstone O'Neill, 1888 - 1953) 米、劇作家、『地平線のかなた』
コルベ神父 (Maximillian Kolbe, 1894 - 1941) ポーランド、神父、日本長崎聖母の町、収容所
ハメット (Dashiehl Hammett, 1894 - 1961) 米、探偵小説家『マルタの鷹』
オーウェル (Geroge Orwell, 1903 - 50, (Eric Blair)) 英、作家
カミュ (Albert Camus, 1913 - 60) 仏、作家、結核のため教授資格不合格
ヴィヴィアン・リー (Vivian Leigh, 1913 - 67) 英、女優、『風と共に去りぬ』
(バンウンティ号の叛乱の子孫が結核で多く死亡)